

# Asymptotic Analysis of Stickers on Cars as Linguistic Landscapes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00065781">https://doi.org/10.24517/00065781</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 言語景観としての車ステッカーのスタイル<sup>1</sup>

西嶋 義憲

## 1. はじめに

言語景観とは、特定の地域や地区に設置され、自然と視野に入ってくる公共サインや商業サインに印字されている言語表現と理解される (Cf. Landry & Bourhis, 1997)。しかしながら、言語景観は、公共空間に固定して設置されているサインなどに限定することはできない。日本では、さまざまところで文字情報が見られ、それら全体が言語景観を形成していると言えるからである。たとえば、移動体である自動車に貼られている言語表現としてのステッカーも日本社会の言語景観を構成する重要な要素だと考えられる。ところで、他国のドイツに目を移すと、車に貼るこのようなステッカーはドイツ社会で目にするのはほとんどない。そうだとすれば、その意味で、日本の言語景観の1つとして車のステッカーに着目することもできる。さらに、そこに印字されている言語表現とそれによる情報の提示法には、日本の文化的背景による文体的特徴が見られるかもしれない。ここでいう文体的特徴とは、ステッカーに固有の語彙や文法をもった表現ということである。本稿では以下の4つの目標を設定する。

- (1) 車のステッカー (以下、「車ステッカー」と呼ぶ) を言語景観と見なし、日本社会ではいたるところで言語景観が観察されること、すなわち、車ステッカーに着目することで、日本社会における言語景観の多様性を示す；

- (2) 車ステッカーの表現を基に、どのような意図により、何をどのように伝えようとしているのかを文体という観点から分析する；
- (3) 車ステッカーのメッセージは読み手による積極的な解釈を要求するという日本語によるコミュニケーションの特徴が確認できることを示す；
- (4) 車ステッカーには日本の車社会の慣行が反映されていることを指摘する。

## 2. 問題設定

日本の言語景観研究は、経済言語学が発端となって展開してきた(井上, 2000, 2011)。これまでは主に、公共空間に固定して設置されているサインについて、そこにどのような情報がどのような言語で表記されているかに焦点が当てられ、その地域の特性の解明という観点から分析されてきている(庄司ほか, 2009)。倉林(2020)は、公共サインを文体(スタイル)の観点から考察し、そこに見られる特徴的な表現スタイルを明らかにしようと試みている。公共空間に見られる言語景観の研究は、いずれにせよ、街中に固定して設置されているサインを対象にしてきている。しかし、街中に見られる文字情報は、固定して設置されているサインにとどまらない。街中にはそれ以外にも文字情報はあふれている。例えば、街中を走っている車両にも文字情報が見られることがある。そういった文字情報は、特定の社会に特徴的に見られるものかもしれない。だとすれば、そのような移動体に書かれた文字情報も言語景観の一部を構成していることになるので、それも言語景観研究の対象に含めないと、その社会に見られる言語景観の全体像を把握することはできない。そこで、本研究では、街中を走っている車両に貼り付けられたステッカーに着目し、そこに固有の言語表現が見られるかどうかを文体論の観点から分析を試みる。

そもそも、日本社会では、なぜ車両にステッカーを貼る人がいるのだろうか。このような問いを出発点に、どのような情報をどのような表現でど

のように発信しているのかを文体論の観点から考察することにより、従来の言語景観研究対象を拡大し、ステッカーの文体の解明を試みる (Cf. 西嶋, 2018)。

本稿では、以下の4つのリサーチ・クエスチョン (RQ) を設定する：

- (RQ1) 「赤ちゃんが乗ってます」に代表される車ステッカーが日本社会ではよく見られる。しかし、他国、たとえば、ドイツではそういうステッカーの類は基本的に見られない。「初心者マーク」さえない。その理由として何が想定可能であろうか。
- (RQ2) ステッカーの言語表現にはどのような文体的特徴があるのか。それは、公共サインなど他の言語景観と異なっているのか。
- (RQ3) ステッカーの言語表現には、その意図が明確なものもあるが、そうでないものもある。そのような意図が不明瞭なステッカーを貼る背景には、「初心者マーク」に代表される、他者への「配慮」要求があるのではないか。
- (RQ4) しかしながら、他者への「配慮」要求では説明できないステッカーもある。運転者自身の趣味や嗜好を表示しているのはなぜか。それによって何を伝えようとしているのか。

### 3. 方法

#### 3.1. 対象

車を運転している時に前走車の後部を見ると、様々な情報が視野に入ってくる。たとえば、車のメーカー名やロゴ、車種名、車格グレード表示のほか、初心者マーク、高齢者マーク、障害者マーク、リボンステッカー、自動車保管場所標章、燃費基準達成車、その他のステッカー類などが目に入る。しかし、本研究の対象はこのようなステッカー類ではなく、たとえば、ドライバーが任意で貼り付けている「赤ちゃんが乗ってます」や「ドライブレコーダー 録画中」など、主に日本語表現が印字されたステッカーを対象とする。

分析対象とするステッカーは、筆者が車で移動する際に目にした前車の車両後部に貼られていたものである。これらのステッカーの言語情報をメモすることによって収集した(ステッカーに付されたイラストなどの画像は本研究では対象外とする)。そのため、本稿は、網羅的な調査ではなく、今後の本格的かつ体系的な調査のための予備調査報告という位置づけである。

### 3.2. 分析方法

ステッカーの言語表現の文体的特徴を明らかにするために、表現形式、意味内容、機能という3つの観点から分析する。車ステッカーの表示面積は小さい。したがって、そこに表記される言語表現はスペースの制約を受ける。しかしながら、その少ないスペースで的確に情報を提供しなければならない。そうだとするならば、車ステッカーは特有の言語表現が使われている可能性がある。言語表現はある語彙と文法形式をもち、それはある特定の意味内容を伝える。そして、それは、特定の場面で発せられることにより、聞き手に何らかの働きかけをするという点で機能とかかわる。このように、言語表現には、少なくとも表現形式(語彙や文法)、意味内容、機能と結びつき、その組み合わせが言語表現の特徴、すなわち、スタイルを形成すると考えられるため、車ステッカーの言語表現をこの3つの観点から分析する。

## 4. 結果と考察

以下に収集できたデータの一部を紹介する。

「赤ちゃんが乗ってます」「Baby in Car」「Baby on board」「妊婦が乗っています」

「ときどき孫をのせてます」「じじいが運転中」

「後方録画中 ドライブレコーダ搭載車」「Now on recording」「精密機械運搬中」

「速度抑制装置付」「産業廃棄物収集運搬車」<sup>2</sup>

「法定速度を守っています」「安全運転宣言車」「ゆっくり運転しています」

「お近くでもどうぞ」「お先にどうぞ 速度抑制装置装着車」「車間距離注意」

「カードOK」「県内在住」<sup>3</sup>「家に猫がいます」「水曜どうでしょう」など

#### 4.1. 表現形式

ステッカー表現の形式は、まず、述語の有無により大きく「述語文」と「非述語文」の2つに分けられる。述語文は文の種類（もしくは、文の形態）によって、さらに「平叙文」「疑問文」「命令文」の3種類に分けられるが、手元のデータには「命令文」がないため、ここでは省略してある。非述語文は、述語を伴わない文で、手持ちのデータの語種と文末に着目し、「体言止め文」「副詞止め文」「英語の体言止め文」「複合文」の4種類に分類した。「体言止め文」は名詞、あるいは体言で終わる文、「副詞止め文」は「どうぞ」などの副詞で終わる文である。英語文は、それがたとえ文法的に正しくなくても、英単語で構成されていれば、「英語の体言止め文」に分類した。「複合文」はこれら4つの非述語文の組み合わせからなる文である。

述語の有無	文の種類	例
述語文	平叙文	「赤ちゃんが乗ってます」「ときどき孫をのせてます」「ゆっくり運転しています」「法定速度を守っています」「家に猫がいます」
	疑問文	「水曜どうでしょう」
非述語文	体言止め文	「安全運転宣言車」「精密機械運搬中」「速度抑制装置付」「産業廃棄物収集運搬車」「カードOK」
	副詞止め文	「お近くでもどうぞ」
	英語の体言止め文	「Baby on board」「Now on recording」
	複合文	「お先にどうぞ 速度抑制装置装着車」

ステッカーの表示面積は大きくない。そこに短時間で視認可能な情報が盛り込まれるので、簡潔で端的な表現が選択されることになる。したがって、「安全運転宣言車」といったように、名詞で構成され、名詞で終わる文はそれに適合している。また、情報を受け取る相手は見知らぬ人がほとんどなので、「ます」「でしょう」などの丁寧形が選択されていることも理解しやすい。「お近くでもどうぞ」という言い差しの定型句が使われるのも、端的な情報提供という観点から合理的と言える。「Baby on board」などの英語表記ステッカーは、それがたとえ英語として不自然な表現であったとしても、頻繁に見られる。この表現は、「赤ちゃんが乗ってます」と同等の意味情報をもっているが、それを選択せず、英語表現のステッカーを貼るのは、一種のファッションとして、あるいは英語能力があることを誇示するシンボリックな機能をもつと解釈することもできる。

## 4.2. 意味内容

意味内容については、ステッカーで言及される対象によって、同乗者(物)の存在、運搬物、車両装着機器の存在、車両装着機器の作動状態、運転者の属性もしくは運転態度表明、運転者の趣味・娯楽情報、後続車両への指示の6つに分類できる。

言及内容	例
同乗者(物)	「赤ちゃん」「妊婦」「孫」
運搬物	「産業廃棄物」
車両装着機器	「速度抑制装置」「ドライブレコーダ」
車両装着機器の作動状態	「録画中」
運転者の社会的属性・態度	「じじい」「法定速度を守っています」
運転者の居住地・趣味・娯楽	「県内在住」「家に猫がいます」「水曜どうでしょう」
後続車両への指示(注意喚起や勧めなど)	「車間距離注意」「お先にどうぞ 速度抑制装置付」

運転者以外に乗用車に乗せている同乗者(同乗物)については、「〇〇が乗ってます」といった形式でその対象に言及する。同様に、トラックなど

の運搬のための車両では、「〇〇運搬中」といった形式で、業務で運搬する内容物に言及することもある。また、「〇〇付」や「〇〇搭載車」といった表現で、特定の機器が装着されていることに言及することもある。さらに、「〇〇録画中」といったように、装着されている機器が作動している状態にあることを表明するステッカーもある。

運転者自体については、「〇〇が運転中」といった形式で、ドライバーの社会的属性を（場合によっては、「じい」といった表現により、おどけて）明示することがある。「法定速度を守っています」のように、規則を守った運転をしているという運転者の態度や方針表明のステッカーもある。これらはすべて、運転している車や運転者の移動に関わる様相を表現しているが、「家に猫がいます」のように、交通や運行とは直接には関係しているとは思えないステッカーも見られる。これは、運転者の趣味や嗜好を表現するものと言える。

また、後続車両への注意喚起や勧めを内容とするものも見られる。

### 4.3. 機能

機能は、注意喚起、勧め、状況説明、運転態度表明、自己アピール、帰属意識（アイデンティティ）表明の6種類がある。

機能	例
注意喚起	「車間距離注意」
勧め	「お先にどうぞ 速度抑制装置装着車」
状況説明	「赤ちゃんが乗ってます」
運転態度表明	「法定速度を守っています」
自己アピール	「安全運転宣言車」「家に猫がいます」 「県内在住」 <sup>3</sup>
帰属意識（アイデンティティ）表明	「水曜どうでしょう」

ステッカーは、多くの場合、市販されているものの中から選択し、それを意図的に車両後部に貼り付けるものなので、後続車両に対して何らかのメッセージを伝える目的があるはずである。たとえば、「車間距離注意」と



いうステッカーは、そこに印字された表現から、後続車に車間距離を保つよう注意を促しているものと容易に理解できる。しかしながら、このように、ステッカーの表現自体に明確に目的ないし意図が言明されているものはことのほか少ない。多くのステッカーは、上節で見たように、単に、同乗者、車両に取り付けられた機器、それらの作動状態、運搬物、運転者の社会的属性ないし運転態度などを表明しているに過ぎない。このような表現からはその意図が読み取りにくい。情報提示のみで、そこに目的もしくは意図が明瞭に表現されていないからである。また、たとえば、「家に猫がいます」のように、情報は書かれてあるのが、その内容が車の運行と直接に関わらないものもある。

#### 4.4. ステッカーの分類

以上のことから、収集したステッカーの表現を眺めていると、その装着の意図が明確に窺えるものとそうでないものというように、大きく2つに分けることができる。さらに、意図が明確でないもののなかで、公道で車を運転することと直接に関係していないように見えるものもある。ここでは、その意図の明確度の違いと公道での運転との関連の有無により、ステッカーを「目的優先型」、「情報優先型」、「自己アピール型」の3種類に分けて論じていく。目的優先型とは、たとえば、「車間距離注意」のように、ステッカーを貼ることにより、運転者の意図もしくは目的を明確に表現するものである。情報優先型とは、たとえば「赤ちゃんが乗ってます」のように、運転者は明確にその目的を明示しないで、単に特定の情報を提供するものである。このようなステッカーは、その意図を後続するドライバーが解釈することが期待されている。自己アピール型は、たとえば「家に猫がいます」や「水曜どうでしょう」など、公道での車の運転とは直接関係のない情報を発するステッカーではあるが、ドライバー個人の趣向、遊び心、他者(車)との連帯<sup>4</sup>や安全性を訴えるものである。以下に収集したデータを表にして示す。

分類	例	機能
目的優先型	「お先にどうぞ 速度抑制装置装着車」 「車間距離注意」	勧め 注意喚起
情報優先型	「赤ちゃんが乗っています」 「ドライブレコーダー録画中」 「安全運転宣言車」 「精密機械運搬車」 「法定速度を守っています」	情報提供 (交通関連)
自己アピール型	「家に猫がいます」 「水曜どうでしょう」 「県内在住」	情報提供 (交通非関連)

量的調査は未実施なので、明確な数値で示すことはできないが、印象として日常的に目にするステッカーの大部分は情報優先型のように思われる。だとするなら、その提示された情報のみから、それを目にする後続するドライバーは発信者の意図を解釈することが期待されていることになる。このようなコミュニケーションの仕方は、日本語談話にしばしば見られる。この傾向は、Hinds (1987) により読み手 (聞き手) 責任の言語と特徴づけられている。

Hinds (1987) は、ディスコースの理解の責任の所在について、英語は話し手 (書き手) 責任、日本語は聞き手 (読み手) 責任の言語に分類されると述べている。これは、同じ場面で発せられる典型的な発言を考えればわかりやすい。たとえば、ある教室である学生が発言している場面で、その発言者の声が小さくて聞き取れないとき、英語なら “Speak more loudly please” と言い、日本語では「聞こえません」と言うだろう。英語は聞き手に対して意図を明瞭にし、積極的に働きかけて行動を促すが、日本語は状況を提示するのみで、その意図の解釈を聞き手に委ねる。この例における日本語の「聞こえません」という発言から「大きな声で」という要請の読みが可能となるためには、聞き手はその間の論理的な空所を埋めていく必要がある。この例では、話し手は「聞こえない」状況を聞き手にあえて表明

している。この発言は、その状況が話し手にとって好ましくない状況であることを吐露していると聞き手は解釈する。そして、聞き手はその好ましくない状況を解消するよう示唆されたと推察し、その解決方法を考える。その結果として「より大きな声で」話すことにより解決可能であるという認識に達し、「大きな声で」話すことが要請されていると解釈する。ある情報が提供されているだけで、その発話意図が明確化されていない場合、それを解釈するための枠組みが必要となる (Cf. Nishijima, 2010: 57)。

#### 4.5.「情報優先型」ステッカーの解釈

ここで、車ステッカーの解釈を考えてみよう。ステッカーを貼る意図は、それによって運転者は、後続するドライバーに何らかの意図を伝達しようとしているという前提がある。その意図が明瞭に表現されているものなら問題ないが、それが不明瞭な場合、ステッカーに書かれた情報をもとに、後続車はその意図を解釈しようと試みることになる。ステッカーの本来の役割は、何らかの情報や意図を端的に後続するドライバーに伝えるものであるという観点からすれば、そのような明瞭でない表現は本来のステッカーの役割、すなわち、ステッカーに特徴的な「文体」からずれることになる。たとえば、「赤ちゃんが乗ってます」というステッカーを貼る意図はどのように解釈可能であろうか。筆者の同僚の何人かにどのように解釈するかを尋ねたところ、「ゆっくり走ります」という意図を伝えようとしているという回答が多かった。しかし、赤ちゃんを乗せていることを表明することが、ゆっくり走ることを意味するという解釈はどのように説明できるだろうか。赤ちゃんを乗せていたとしても、ベビーシートもしくはチャイルドシートで体を拘束するのは義務である。だとするならば、赤ちゃんを乗せていることがゆっくり走ることの原因にはならない<sup>5</sup>。それにもかかわらず、このステッカーを目にする人は、運転者がゆっくり走ることを宣言しているという解釈を取る場合が多い。なぜだろうか。ここで、ドイツ社会と対比することで、この解釈の妥当性を説明してみたい。

すでに述べたように、基本的にドイツには上で見たような車ステッカー

は存在しない。「初心者マーク」にあたるステッカーの類もない<sup>6</sup>。たとえば、「赤ちゃんが乗ってます」や「精密機械運搬中」、ましてや「法定速度を守っています」にあたるステッカーは、筆者の知る限り、見たことがない。初心者だろうが、高齢者だろうが、どのような人物が運転しているようが、また、赤ちゃんや妊婦を乗せていようが、精密機械や産業廃棄物を運搬しているようが、どんな状況であれ、公道では当該の交通ルールがあり、それに従って運転することが期待されている。そのため、ステッカーを貼って何かを訴える必要はない。つまり、共通の交通ルールという行動規範に従って運転業務を行うことがすべてで、それ以上でもそれ以下でもない。規則による行動については、たとえばサッカーの試合を考えればわかりやすい。初心者の選手が出場していたとしても、その選手自身が周りの選手に対して何らかの配慮を要求しないだろうし、周りの選手もその選手に対して配慮をすることはないだろう。公道での運転もそれと同様で、一旦、公道にできれば、皆が同じ交通規則を遵守して運転することになる。それが「当たり前」のはずである。規則に従ってふるまえばいいので、それ以外の情報源としてステッカーを貼る意味はない。

しかし、日本社会では、ドイツと同様に、公道では交通規則を守って運転することが期待されているはずであるが、ステッカーを貼るドライバーが存在する。ステッカーを貼ることで何かを伝えようとしていると推測できる。通常なら、「赤ちゃんを乗せている」ということを表明する必要はないはずなのに、あえてそのようなステッカーを貼る。そして、それによって、「ゆっくり走ること」が示唆されることがある。そのような解釈が成立するのは、どのような解釈の枠組みを想定すれば可能だろうか。

ここで日本人ドライバーの公道での運転慣行を考えると説明が可能になる。日本の公道では、法律の遵守が求められてはいるものの、現場の交通状況の判断が法律に優先するようである<sup>7</sup>。たとえば、時速40キロ制限の国道で車を運転しているとしよう。そこをその指定された制限速度で走っているドライバーはまれである。たいていの場合、だいたい10キロくらい速い時速50キロ程度で車両が流れている。指定された速度を守らずに

走行することが常態化しているとさえ言える。このことは、「法定速度を守っています」というステッカーの存在が逆説的に示唆している。あえて決められた速度で走ると宣言するのは、そうでないことが一般的だからと推測できるからだ。また、「安全運転宣言車」というステッカーさえある。これも法定速度を守っていないなど、交通法規を遵守していず、その意味で安全ではない運転をしていることが前提として想定される表現のようだ。そのため、このようなステッカーを貼ることで、運送会社のイメージアップを狙っている可能性もある。

このように考えてくると、ステッカーを利用して、様々な関与理由を提示することにより、車の流れに逆らう、ゆっくり運転を示唆し、周りのドライバーからそのような運転を理解してもらおうとしていると解釈できる。そこには、「初心者マーク」に代表される配慮要求の考え方が見て取れる。

## おわりに

公道では交通規則を遵守するのがすべてのドイツ社会との比較により、日本のドライバーの多くは制限速度などを必ずしも守らないなど、法律によって定められた制限速度や義務を、状況により主観的に解釈して行動していることがわかる。そのような慣行に反する行動をとるために、様々なステッカーを貼ることで対処している可能性がある。その典型は、「初心者マーク」に見られる他者への配慮要求であろう。日本のコミュニケーションの習慣、公道での慣例が、ステッカー行動に反映していると言える。また、ステッカーによる表現行動は、Hinds (1987) による「聞き手・読み手責任」の言語に分類される日本語談話の表現構造が反映している可能性があることが示唆された(RQ1-3への解答)。また、車の運行とは直接に関連しない内容のステッカーが貼られる背景には、遊び心や他者(車)との連帯表明を含めた、運転者の自己アピールの心理があることが推察された(RQ4への解答)。

本研究で分析したステッカーは、運転中にたまたま目にしたものを記録

したものであり、網羅的でない。体系的な収集方法を考え、それに基づいて資料を収集し、本研究の結果を検証する必要がある。また、比較はドイツしか行っていないので、他の国々の事情との比較も今後の課題となる。さらに、ステッカーの読み手は、後続する車両のドライバーに限定されない。たとえば、スーパーなどの店舗に駐車している車両にステッカーが貼られているのを目にすることもある。したがって、通行人など、必ずしも後続するドライバーが読み手になるとは限らない。その場合、ステッカー情報の解釈が異なることもありうる。この点についても調査する必要があるろう。

車ステッカーは、スーパーのレジなどで店員が胸につける「研修中」「アルバイト」といった名札もしくはバッジと関連している可能性がある。客からの配慮（寛大さ）を求めている点で共通しているからである（これも日本の言語景観を構成していると言えそうである）。この比較は今後の課題とする。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、査読者の方々からたいへん有益かつ詳細なコメントをいただいた。記して感謝したい。

## 注

- 1 本稿は、2021年8月28日に中国南京大学で開催された「国際都市言語学会 第18回年次大会」において「言語景観としての車のステッカー—ドライバーは何を伝えようとしているのか—」というタイトルで口頭発表した原稿に加筆したものである。
- 2 「速度抑制装置付」と「産業廃棄物収集運搬車」についてはそれぞれ国土交通省と環境省によりその表示が義務付けられている（国土交通省と環境省のホームページ参照）。
- 3 「県内在住」は2020年以降、新型コロナ禍を背景として貼られるようになった。たとえば、運転する車両に新型コロナ感染者を多数発生させている東京や大阪のナンバープレートが取り付けられていると、それだけで感染の可能性を恐れて忌避されることがある。そのような処遇を避けるための対策だと考えられる。
- 4 査読者の方から、「遊戯性」と「他者(車)との連帯」の事例の指摘を受けた。たしかに、「水曜どうでしょう」はテレビ番組の名称であり、同じ番組を見ているドライバー同士の連帯をはかるものと解釈できる。遊び心(遊戯性)については、たとえば、「じ

じいが運転中」というステッカーが自分のことを自嘲気味に表現しているので、遊び心の1つの例と言えるだろう。

- 5 日本では、2000年の道路交通法改正(第71条の3第3項)によってチャイルドシートの着用が義務化された(警察庁ホームページ)。それ以前なら、場合によっては、赤ちゃんをシートに拘束せずに、抱きかかえていたこともありうる。そのような状況ならば、赤ちゃんの安全のために「ゆっくり走る」との関連は理解できないことはない。
- 6 ドイツにはないが、フランスには「A」と書かれたステッカーがあり、これが日本の初心者マークに相当するものである。日本は若葉というイメージであるが、フランスは文字である点が興味深い。査読者によると、英国や豪州では「L」や「P」という文字のステッカーがあり、これらが初心者マークにあたるとのことである。
- 7 これが典型的に見られるのは信号機のない横断歩道の近くにいる歩行者とその横断歩道を通しようとする車との関係である。ドイツでは、横断歩道の前に歩行者が通りかけ、立ち止まると、ほぼ100%の確率で車は停車する。急ブレーキをかけてでも停車する。法律で定められているからである。ところが、同じ場面では日本ではどうかであろうか。歩行者もドライバーもお互いに法律とは無関係な「不必要な配慮」を行う。法律で停車が義務付けられているにもかかわらずである。歩行者は、もし自分が横断歩道の前で立ち止まると交通の流れを遮断して「迷惑」をかけてしまうことになる。少し待てば、車の流れが切れる可能性があるので、その時に渡ればよいと考える。ドライバーはドライバーで、もしここで自分が停車すると、歩行者が申し訳なさそうに頭を下げながら、急いで渡ろうとする。それは相手をせかすことになり、「迷惑」に思われるかもしれないと考える。このようにお互いが配慮をして、その結果、法律で定められているにもかかわらず、渡ろうとしないし、止まろうとしないというように、お互いがよかれと思って行動することになる。

## 文献

- Hinds, J. (1987). Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology. In U. Connor & R. B. Kaplan (Eds.), *Writing Across Languages: Analysis of L2 Text* (pp. 141-152). MA: Addison-Wesley.
- 井上史雄(2000). 日本語の値段. 大修館書店.
- 井上史雄(2011). 経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—. 明治書院.
- 環境省ホームページ(産業廃棄物収集運搬車への表示・書面備え付け義務)  
<https://www.env.go.jp/recycle/waste/pamph/index.html> (最終閲覧日: 2021年9月7日)
- 警察庁ホームページ(子供を守るチャイルドシート)  
<https://www.npa.go.jp/bureau/traffic/enzen/childseat.html> (最終閲覧日: 2021年9月7日)
- 倉林秀男(2020). 日本の公共サインのスタイル, 文体論研究, 66, pp. 71-78.
- 国土交通省ホームページ(速度抑制装置の装着に関する経過措置期間の終了について)  
[https://www.mlit.go.jp/kisha/kisha06/09/090901\\_.html](https://www.mlit.go.jp/kisha/kisha06/09/090901_.html) (最終閲覧日: 2021年9月7日)
- Landry, R. & R. Y. Bourhis (1997). Linguistic Landscape and Ethnolinguistic Vitality: An Empirical Study. *Journal of Language and Social Psychology*, 16(1), pp. 23-49.
- 西嶋義憲(2018). 機能的に等価な日独対応表現の比較—比較の合理性をめぐって—, 社会言語科学, 21(1), pp. 175-190.

## 言語景観としての車ステッカーのスタイル

Nishijima, Y. (2010). Perspectives in Routine Formulas: A Contrastive Analysis of Japanese and German. *Intercultural Communication Studies*, 19 (2), pp. 55-63.

庄司 博史・フロリアン クルマス・ペート バックハウス (2009). 日本の言語景観. 三元社.

——にしじま よしのり・金沢大学——



## Abstract

### A Stylistic Analysis of Stickers on Cars as Linguistic Landscapes

Yoshinori NISHIJIMA

Walking around the streets in Japan, you can see various linguistic landscapes such as public signs and commercial signs installed on streets and buildings. It can be said that the city is full of various textual information. Textual information is not limited to signs installed on streets and buildings. You will notice that vehicles such as private cars and trucks running in the city also have a wide variety of stickers, such as *akachan-ga notteimasu* ('baby is on board') and *watashi-wa hōteisokudo-o mamotteimasu* ('I am keeping the legal speed'). These signs can be also regarded as a kind of linguistic landscape. However, unlike ordinary signs that are fixedly installed in the city, many stickers on cars do not always have a clear meaning. In this research, we focus on stickers attached to vehicles that have been rarely taken up in the field of linguistic landscape research so far, even though they form a part of the linguistic landscapes of Japanese society. The purpose of this study is fourfold: (1) to show the diversity of linguistic landscapes in Japanese society by considering car stickers also as linguistic landscapes; (2) to reveal what kind of information is to be conveyed by what kind of expression forms from a stylistic point of view based on the expressions on car stickers; (3) to show that understanding of a message on a car sticker requires the readers' active interpretation; and (4) to suggest that the use of car stickers reflects the customs of motorized society in Japan.